

跋

少し疲れが出たらしく、原稿が書けなくて弱りました。秋ともなれば、元氣を取戻して再出發です。今度は然し二つの優れた御寄稿を頂きましたから、それで帳消しのほどをお願ひします。

堀江保藏先生に「近松の時代」に就いて書いて頂きました。先生は京都帝大經濟學部助教授で、經濟史擔當。現在の國文學に最も缺けてゐるものが、茲に扱はれたやうな根本的な問題である以上、此の一文は近松の理解に直接的な、又間接的な示唆を投ずることの大なるものがあります。此の執筆に當つて、近松の作品を數種類讀むの勞まで取つて下さいました堀江先生に、紙上より厚く御禮申し上げます。

鴻池幸武氏からは古靱太夫の寺子屋に關する

詳細な批評を頂きました。氏は私の批評に蛇足を加へるものと謙遜して居られますが、私の出鱈目な批評とは、同一視すべくもないことは、一讀明瞭であります。故石割松太郎の情熱を繼承して、氏の文樂魂も熾烈なものがあります。

「壽三郎の御所三」は杉齋阿彌の名評の外へ半歩も出られなかつたことを、残念に思つて居ります。結局、優れた劇評は優れた演劇の下に生れ得るものなのでせうか。次の劇評集では此の低調を抜け出したいものです。

他の二つの作品は殘暑御見舞のつもりであります。

尙、扉の寫眞は友人稻畑勝之助君から頂きました。又、藤森成吉氏の短歌は、小生宛同氏の御書簡より、御迷惑を省みず抄録させて頂きました。厚く御詫び申し上げます。